

## ハイデガーのニーチェに抗する

### ——『生死』講義第7回から第10回について——

小川歩人

第6回までで生物学とモデル、つまり、真理の範例的モデルとしての生の科学の位置について論じられてきた。『生死』講義の後半からはニーチェ（第7回から第10回）とフロイト（第11回から第14回）という特権的事例があつかわれることとなる。彼らにはともに科学主義、生物学主義として批判がなされてきた経緯があるが、デリダは、彼らのテキストがむしろ現代の生物遺伝学の成果を受けてなお、喚起的な力能をもっていると指摘しようとする（こうしたデリダの態度は、1960年代の「差延」の思想家としてのニーチェ、フロイトという評価を延長している）。

『生死』後半部がもとになっている『絵葉書』はハイデガーとフロイトの出会いについての書物であったが、1970年代のデリダにとってハイデガーのニーチェをどうするかという観点も重要なものであった。デリダのテキストは発表時と出版時に時差があるが、ニーチェについて書かれたテキストの初出時期を並べてみれば、「タンパン」（1972）、「エプロン——ニーチェの複数の文体」（初出「文体の問い」1972, 出版1978）、「生死」（1975-76）、「ニーチェの耳伝」（初出1979, 出版1982）、「権力への善き意志(II)署名を解釈する(ニーチェ/ハイデガー)」（初出1981, 出版1984）と1970年代を通したデリダのニーチェへの関心がみえてくる<sup>1</sup>。

ハイデガーのニーチェということで念頭におくべきは、いわゆる最後の形而上学者「ニーチェ」というハイデガー的解釈である。1960年代のデリダはハイデガーに大きな影響を受けながら、そのニーチェ解釈に対しては両義的な態度をとっていた。一方でデリダは「古典的形而上学に対するニーチェ的破壊」を引き立てつつ、あくまで価値としての存在者の形而上学にとどまった人物としてニーチェを批判的に捉えるハイデガーの議論を引き継いでいる<sup>2</sup>。こうした視点は講義録や

<sup>1</sup> 『生死』講義第8回、第9回は一部、ガダマーとのコロックの原稿「権力への善き意志(II)署名を解釈する(ニーチェ/ハイデガー)」の元となるテキストとなっている。

<sup>2</sup> 「この講義[「ニーチェの言葉『神は死せり』]」は、ニーチェの〈形而上学〉についての省察です。古典的形而上学に対するニーチェ的な破壊にもかかわらず、ニーチェの形而上学があるのです。それはたんに彼の美学や認識論等の一面ではありません。あらゆる形而上学と同様に、この形而上学は、存在者を存在者として規定しようとしています。ここでは、それは価値としての存在者の形而上学、価値の形而上学です。ハイデガーは、この価値の形而上学についての説明を追跡することによって、存在者それ自身がその本質において力への意志であり、その実存において「〈同じものの永劫回帰〉」であることを示そうとしています。しかし、この本質 *essentia* と実存 *existentia* の分離は、この遺産を糧にする形而上学によって熟考されることはありませんでした。形而上学は、エンスとしてのエンス、すなわち存在者としての存在者が、本質および実存として分裂する以前の、存在の意味の統一についての問いを提起することはないのです。[...] ニーチェはこのような形而上学の限界に囚われています」

『グラマトロジーについて』といった著作のなかで繰り返し指摘されているものだ。しかし、同時にデリダは形而上学の中に単にとどまり続けるのではないニーチェの徹底性を救おうともしていた<sup>3</sup>。このとき、ニーチェはハイデガーによる批判以後にハイデガーの解釈を超え出る差延の思想家としてのポテンシャルを引き立てられる。たとえば「差延」論文では、ハイデガーによる現前性や意識への批判が、むしろそれ以前にニーチェやフロイトの挙措であったことが指摘される<sup>4</sup>。そして、現前性と結びつく真理の開示ではなく、むしろ不断の読解と能動的解釈のテーマ系が、また真理なき暗号、真理によって支配されていない暗号システム、迂回の兆候学がニーチェ的な主題として提示される。このとき、デリダにとってニーチェは形而上学者であるどころか、形而上学の文法やそれが支配する文化、哲学、科学に対して諸力の軋轢を対置する差延の思想家なのである<sup>5</sup>。

本セミナーで直接的にニーチェのテキストを読解する第7回では、これまでに展開された範例的学としての生物学、生の／による科学についての批判から、ニーチェのテキストの検討へと移っていく。デリダは、ニーチェのテキストにおいて真理の問題構成が生を参照することに注意を促し、『哲学者の書』における「真理の衝動」、そして「真理なるもの」というよりも「真理の

---

(Jacques Derrida, *Heidegger – la question de l'Être et l'histoire. Cours à l'ENS-Ulm 1964-1965*, édition établie par Thomas Dutoit avec la collaboration de Marguerite Derrida, Galiée. 2013, pp. 42-43 (『ジャック・デリダ講義録 ハイデガー——存在の問いと歴史』亀井大輔・加藤恵介・長坂真澄訳、白水社、2020年、38頁))。

「[...] ニーチェ的破壊は依然として独断的であり、それが打倒すると称している壮大な形而上学的体系にとらわれているからである。この点について、またこういった類の読解においては、ハイデガーとフィンクの論証には反駁の余地がない」(Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Minuit. 1967, p. 33 (『根源の彼方に グラマトロジーについて』足立和浩訳、現代思潮社、2012年、48頁))。

<sup>3</sup> 「解釈、パースペクティブ、評価、差異といった諸概念や、「経験論的」あるいは非哲学的なあらゆるモチーフ [...] を徹底化することによって、ニーチェは、形而上学の中にたんに留まり続ける [...] どころか、シニフィアンをロゴスに対する、また真理、最初のシニフィエ——どのように解かれてもよい——と密接に関連している、依存、派生の関係から解放することに大いに力を尽くしたように思われる」(ibid., pp. 31-32 (同上 46-47頁))。

<sup>4</sup> *Marges——de la philosophie*, Minuit, 1972, p. 19 (『哲学の余白』上巻、高橋允昭・藤本一勇訳、法政大学出版社、2007年、58頁)

<sup>5</sup> 「こうした差延としての同じものの展開から出発してこそ、永劫回帰において差異と反復が同じものであることが告知される。ニーチェではそれらのテーマはいずれもみずからの差延のうちで変装するある審級の迂回ないし術策を診断する兆候学と関係づけられる。あるいはさらにそれらのテーマはいずれも、事柄そのものがその現前性において現前化されることという真理の開示に代えて不断の読解をすすめる能動的解釈のテーマ系全体と関係づけられる。真理なき暗号、あるいは少なくとも真理の価値によって支配されていない暗号システム。そのとき真理の価値はこの暗号システムの一つの機能、包含され書き込まれ一定の区域のなかに閉じ込められた機能にすぎなくなる。[...] ニーチェは形而上学の文法が文化、哲学、科学を支配しているいたるところで、そうした形而上学の文法システム全体に対して、さまざまな異なった力のあいだの、そしてまた諸力の差異のあいだの、運動中の「能動的な」軋轢を対置する。われわれはその軋轢を差延と呼んでよいだろう」(ibid., pp. 18-19 (同上、59-60頁))。

諸効果」、「生の諸効果」について語ろうとするニーチェに焦点を当てる。そして、生と真理についての二つの命題「生は自らを守る、ないし保存するために真理を欲する」／「生は自らを守る、ないし保存するために真理を逃す」によってニーチェのテキストにおける生をめぐる両義的な運動を示しつつ、ニーチェにおける複数の真理の問題を指摘する。「生が真理を欲し、真理を逃れるものでもある以上、自らを守り、自らを失い、自らを破壊するさまさまの異質な複数の生、水準、質、生の諸力があるのです」<sup>6</sup>。すでにデリダはスリジ＝ラ＝サールでのコロックで発表された「文体の問い」において、ニーチェの女性蔑視的なテキストから女性の真理、真理の複数性をニーチェのテキストから引き出し直すことを試みていた。本セミナーでは、ニーチェにおける構築する偽装、嘘、暗号学、クリプトポグラフィーといった系列が、生き生きした自然、ピュシスを参照する真理／自殺としての真理という二重性として、生ではなく、生死として描き直されていると言える。また第7回で中心的に読解される「真理への衝動」、「偽装 *Verstellung*」の主題は『哲学者の書』所収の「道徳外の意味における真理と嘘の理論的紹介」から導入されているが、真理とは異なる偽装や暗号の思想家ニーチェについての具体的な読解箇所であり、1960年代のデリダのニーチェ記号学への注目と合わせて再検討されるべきである<sup>7</sup>。

「偽装 (*Verstellung*) は生に到来する何かではなく、生き物の組織＝器官としての知性に到来するものです。この偽装はそれによって生が（ニーチェが言うには、最も弱い、「最も弱い諸个体」だが常に有限で、どこかつねに弱い力）、つまり、この偽装はそれによって（弱く、強い）生が自らを守り、自らを維持するところのものです。したがって、真理に反して、しかし真理が偽装によって構築される限りで、真理によって、偽装の生産物が存在するのです。それゆえ、諸々の真理があるのです。そして、これからみていきますが、それらは守りかつ殺すものなのです。[……]もし偽装が生き物のひとつの操作、生き物のひとつの行動ならば、もし生き物のハビトゥス、生き物の組織＝器官としての知性の存在や行為の仕方へのように、すべてが偽装へ回帰するならば、効果を算出する偽装は、真-偽の語彙ではなく、当然、テキストのタイトルが示すように、道徳外の意味におけるもっともらしさ-嘘によって翻訳されるべきです。その操作における言語活動の役割がそれを確証します。つまり、人間においてニーチェが言うように、偽装の技術はその頂点に達します。というのも言語活動、言説はその嘘 - 存在あるいは誤謬の仮面へ、こういった方がよければ、その最も偉大な「真理」を与えるからです」<sup>8</sup>

第7回においてデリダはニーチェのテキストにおける鍵の隠喩の分析もおこなっている（この

<sup>6</sup> ジャック・デリダ『ジャック・デリダ講義録 生死』吉松覚・亀井大輔・小川歩人・松田智裕・佐藤朋子訳、白水社、2022年、177頁。

<sup>7</sup> Cf. たとえば『ハイデガー講義』第3回における『ギリシア悲劇の時代における哲学の誕生』、『権力への意志』やニーチェへの参照など。

<sup>8</sup> 『生死』、178頁

箇所でのサラ・コフマンへの言及については本イベントでのファヨル入江の発表に詳しい)。デリダは真理や無意識を開示する「鍵語」、「マスターキー」ではなく、自然によって（≠経験的あるいは超越論的主体）投げ捨てられ、隠されうる鍵の運動へ注目していく。哲学的テキストにおける操作的隠喩の機能の分析は脱構築の中心的技法であろう（Cf.『声と現象』、「白い神話」）。真理へアクセスする特権的な「鍵」の隠喩をずらすことは、本セミナーと同時期の『吊鐘』においてサルトルの実存主義的精神分析やラカンの超越論的シニフィアンに対して試みられていた戦略であったが、これも本セミナーでのニーチェ読解と再度合わせて検討されるべきであろう。

第8回から第10回までで新資料として注目すべき点の一つは、デリダによるハイデガーの『ニーチェ』読解であろう。1971年にクロソウスキーによって仏訳された同書を、デリダは1972年のスリジ＝ラ＝サルでのコロックにおいて参照していたが、その言及は重要なものとはいえ断片的であった。本セミナーではとりわけ8回「ことがら（ニーチェ）」、9回「解釈について」、10回「分業についての思考——そして固有名の感染」において当該テキストを註解しながら、形而上学者ニーチェとは異なる「複数のニーチェ」を読むデリダの姿が見出せる。

先に述べたように、ニーチェは科学主義、生物学主義という観点から批判がなされてきた経緯があるが、ハイデガーのニーチェ読解はいわゆる生物学主義を超える論理をニーチェのテキストのうちに見出そうとする点で範例的なものである。第8回以降では、ハイデガーの『ニーチェ』における生物学主義批判の読解（「いわゆるニーチェの生物学主義」、「ニーチェの〈認識の〉生物学的解釈」が中心）がおこなわれ、ニーチェのテキストの統一性をめぐる読解が検討されていく。

各回を簡単にみておこう。第8回で特徴的なのは『ニーチェ』の序文へのこだわりである。デリダは「Niet sche」という誤植に注目しながら、ハイデガーによる一文「「ニー チェ」——この思想家の名は彼の思考のことがら Sache をここで表示する」を、クロソウスキーの仏訳とともに解釈していく。デリダはハイデガーが伝記主義、心理学主義、還元された経験論、生物学主義、生の哲学から距離をとりながら、ニーチェの思想の本質的統一へ向かうことを評価する。その上で、ニーチェが単一の名しかもたないのだと主張するハイデガーに対して、デリダはニーチェが複数の名をもつことを指摘しようと試みるのである。より具体的には、デリダは、ハイデガーがニーチェの思想、形而上学を「生物学主義」から区別しつつ、同時に、「生物学的なもの bio-logie」「伝記的なもの bio-graphie」、「自伝的なもの」を削ぎ落とし、非本来的なものとみなしながら、ニーチェの思想の統一を繰り出そうとする操作性に注目している。ハイデガーはまずニーチェの思想の統一を前提しているが、これは、また、『ニーチェ』を執筆するハイデガーの思想の統一を支える統一性でもある。この統一を揺り動かす係争関係が本セミナーにおける大きな課題の一つである。「おそらく一挙に、複数の小文字のニーチェとマルティン・ハイデガーとのあいだの、あるいは複数の小文字のニーチェといわゆる西洋形而上学なるものとのあいだの係争事項、Streitfall、戦争、ないし Auseinandersetzung があります」<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> 『生死』、213頁。

ハイデガーにとって、ニーチェは、存在者の全体についての問いとして、「力への意志」と「永劫回帰」を調停することで、「全体性における存在者の規定」、存在者の全体についての思考、つまり最後の形而上学者となる。しかし、生死の思考において、ニーチェは全体性についての形而上学的思考から遊離していく。第9回では、『力への意志』および『悦ばしき知識』の二つの相反する生と死にかんする引用から発して、ハイデガーとは異なる非-全体的なニーチェの姿が注目される<sup>10</sup>。

「私たちの世界全体は、無数の生物の灰である。そしていけるものは全体と比較してどれほど僅かであるにしても、それでもすべてのものはすでに一度は生へ転換されたことがあるのであり、今後もそういうことが続くのである」（第12巻、112番）

「死は生に対立しているなどと言わないように気をつけよう。生ける者は死せる者の一種にすぎず、それも非常に稀な種類なのである」（109番）

デリダによればハイデガーのニーチェ読解は、ニーチェを形而上学の内部に投げ捨てると同時に、形而上学の彼方へ向かわせるような戯れのなかにある。第9回では、こうした戯れを整序しようとするハイデガーの解釈的操作について「混沌」、「存在」、「人間化」、「否定神学」といった論点に注目する読解がおこなわれる。

第10回でも引き続きニーチェの署名、思考の単一性を主張するハイデガーによる読解の批判的検討がおこなわれる。ハイデガーにおいては、ニーチェの「永遠回帰」の思考と「力への意志」の思考は「統一」のもとで思考され、「力への意志」の思考がニーチェの唯一の思考であり、本質的思想家、形而上学者の先端としての「ニーチェ」像が描かれるのだった。こうした「統一性」や「本来性」の価値づけを構成していくハイデガーの身振りへの疑念は「ゲシュレヒト」連作や『アポリア』といった後年のテキストでも反復されるものである。

この統一的価値づけを問うために、本セミナーでデリダは繰り返しハイデガーによるニーチェの生物学主義的解釈についての批判を検討する。ハイデガーは、ニーチェにとって価値が生 conditions であり、生が生であるための前提条件であると注釈することで、生物学に還元されない、生の原理、自己強化の問いをニーチェの中に見出そうとする（このとき、「存在者の全体」は「生」であり、「生の本質」は「力への意志」として、命令の力（アルケー）と、詩化する力（超越論的構想力）から理解される<sup>11</sup>。この力の水準にいかなる動きを見出すのかが、これ以後のデリダによるハイデガー読解の争点になるだろう）。ハイデガーの態度は両義的である。ハイデガーは、ニーチェが依然として正当性、合致という古典的真理概念を保持していると批判しつつ、同時にニーチェのいう「生」が個別科学に回収されないものだということも強調する。個別科学はあくまで

<sup>10</sup> 『生死』、217頁。

<sup>11</sup> 『生死』、242頁。

領域的なものであり、対象性ないし存在者の領域にしかかかわることがないのに対して、哲学者は規定された領野の意味や全体性について問いを提起することができるのである。

ただし、デリダはこのようなハイデガーの解釈には、科学／哲学ないし形而上学という古典的な分業の図式があると指摘する。

「ニーチェが生について語る時、ハイデガーによれば、彼が生として存在者の全体性を規定するとき、ニーチェはそもそも諸概念を生物学と呼ばれるひとつの領域科学から借りてきてはいない。彼のアプローチは、ひとつの領域の帝国主義的な横溢ないし侵犯としての生物学主義と、形而上学的諸根拠を無視し、自ら自身の根拠を確固たるものにできると信じる科学的素朴さとしての生物学主義、そのどちらにも属さない。ニーチェは形而上学的に、生と生の諸条件を存在者の全体性として思考しているのです」<sup>12</sup>

ハイデガーは、形而上学的存在論を脱構築しながらも、ニーチェを偉大な形而上学者にするためにしか、しかも「生物学主義」を形而上学の効果にするためにしかニーチェを生物学主義から救わない。対して、デリダの読解は、ハイデガー的な図式に包摂されない複数の「ニーチェ」の可能性を模索するものだと示唆される。

第10回の最終部では他のセミナーでもしばしばみられるように「かなり恣意的に、正当化し得ない仕方」でデリダはハイデガーの読解を放棄し、次回以降でフロイトの『彼岸』の読解へと向かうことになる。

以上で簡単に第7回から第10回の前提と概要を追ったが、内容と周辺のテキストとの関係をもう少し敷衍して論述を終えよう。

『ニーチェ』はニーチェのカント批判にもかかわらず『判断力批判』とニーチェを接合する読解を提示するものであったことを鑑みれば、1970年代のデリダによる『判断力批判』への注目、とりわけとりわけ1973-74「芸術（カント）」、『エコノミーメシス』、『絵画における真理』等にみられる美学論的方向はハイデガーの『ニーチェ』との関係を踏まえて検討すべきかもしれない<sup>13</sup>。のちの著作との関係ということ言えば、1980年代以降のテキストとの関係からも『生死』の段階でニーチェ／ハイデガー論との関係が指摘できる（たとえば『火、ここになき灰』（1987）で印象的に配置される生と死、灰にかんするニーチェからの引用、『コーラ』（1987, 1993）等でも再収録される論点としての「混沌」についての論点など）。

また「保守的」とみなされたテキスト群をどのように読み解くかというデリダの関心から検討することもできるかもしれない。デリダは本セミナーと並行して、大学、国家、教会の再生産

<sup>12</sup> 『生死』、260-261頁。

<sup>13</sup> 「ハイデガーはこの書『芸術作品の根源』で『判断力批判』をそれと名指していないが、他の箇所でもニーチェの読解に対して『判断力批判』を弁護している」。La vérité en peinture, Flammarion, 1978, p. 41（『絵画における真理』上巻、高橋允昭・阿部宏慈訳、法政大学出版局、1997年、56頁）。

にかんする哲学的イデオロギーを分析していた（GREPH にかんするセミナー、大学論など）。「危険な」テキストをその臨界点でどのように読み解くのかという関心は、それ自体ハイデガーがニーチェを読む身振りそのものでもあっただろう。こうしたデリダのスタイルは 1980 年代以降ではヘルマン・コーエン、ポール・ド・マンらのテキストを読む際にも重要な論点だが<sup>14</sup>、その範例としてハイデガーを読むニーチェを読むという理論的作業も位置付けられるはずである。『生死』の論点は多岐に渡るが、本セミナーに見出されるハイデガー／ニーチェとの対決は、改めてデリダのテキストを読み直す大きな契機であることは間違いない。

---

<sup>14</sup> 「戦争中の諸解釈、カント、ユダヤ人、ドイツ人」(1988) (『プシュケー 他なるものの発明II』所収)、『メモワール——ポール・ド・マンのために』(1988) など。